

ノーパズル・ノーライフ

fortissimo 01

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

引きこもりのニート童貞18歳、神狩零はネット上で都市伝説とまで囁かれる天才ゲーマー。しかし彼はいくらゲームをやっても楽しめ、全てもう気分になれなかった。ある日差出人不明の者にメールが届き、全てがパズルゲームで決まる異世界に召喚されてしまいー!?
咄嗟に思いついた小説なのでかなり駄文だと思えますが、よろしく
お願いします！

目次

クソゲーの始まり

ゲーマーの間では都市伝説がある。その中でもっとも有名な話がある。それはほぼ全てのゲームの頂点に君臨している伝説のゲーマーの話。ある者はそのゲーマーを倒したいといい、ある者はあのゲーマーのようになりたいと尊敬する人もいる。そんな伝説のゲーマーの名を……0（ゼロ）という。

ある家の部屋でパソコンの打つ音が聞こえる。そこには引きこもりニート（童貞）18歳の少年……神狩零がパソコンと睨めっこをしている。そのパソコンの画面には戦っている人が映っている。そう彼は今格闘ゲームをしているのだ。しばらく時間が経ち……

『WIN!!』

「ふあ〜〜終わったー」

彼は見事勝利した。しかし彼の顔は満足しているような顔ではなかった。

「はあ〜つまんね……」

つまらない。彼の頭にはそれで埋め尽くされていた。彼は刺激が欲しかったのだ。自分の楽しませてくれる最高の刺激を……。

「まあ暇だからアニメでもみるか！ なーに見ようかな〜」

零がキーボードをカタカタと打ち込んでいるとピロリン！ とパソコンにメールが来た。

「うん？ メールか。えーと、差出人不明？」

零が確認するとそのメールを送ってきた者は不明だった。零は内心嫌がらせメールかと思いいそのメールを開く。その謎のメールにはこう書かれてあった。

『0（ゼロ）。君はこの世界をどう思う？』

「……どうして俺の名前を知ってたんだ、こいつ？」

俺の正体を知る人は知らないはずだ。揺さぶり（ブラフ）か？
まあ面白いからいいか、この世界をどう思ってるかね……。そんなの
一つしかねえだろ。俺はシンプルな答えを打ち込んだ。

『クソゲー』

70億のプレイヤーが好き勝手に手番をうごかす。ルールも目的
もないくだらねえゲーム。勝っても負けてもペナルティ……。黙れ
ば圧力で喋れば疎まれる。こんな世界をクソゲーと呼ばなきやなん
だっというだよ？ すると謎の者から返信が返ってきた。

『いい解答だよ、さすが0だね。ではもう一つ聞こう、もしパズルゲー
ムで全てが決まる世界があったら、どう思うかな？』

パズルゲームって……俺の得意分野じゃねえか。まあそんな世界
があるんだっいたらそうだなー

「俺は生まれる世界を間違えてしまったてわけだ」

俺がそう眩くと部屋の明かりが全て消えた。すると部屋にはノイ
ズ音が鳴り響く。

「っ！ なんだっ!？」

『僕もそう思うよ。君は生まれる世界を間違えた。だからー』

僕が生まれ直させよう』

パソコンから眩しい光が放たれ、俺は意識を失った。

「うつ………。んんはっ。」

目が覚めると部屋の中にいるという事がわかった。だけど俺の部
屋のではない。周りにはパソコンやゲーム機やテレビもおいてない、
それに知らない天井。俺は一体何処にいるんだ？ 俺がそう考えて
いるとドアが開く音が聞こえた。俺はそのドアに視線を送る。

「目覚めましたか？」

「……………」

そこにはとても人とは思えない美少女が立っていた。カーテンから差しこむ光よりも綺麗な白い髪、ルビーにも劣らない真つ赤な瞳。人形のような小さい顔。その華奢な体には純白の服とスカートを纏っていた。大通りを歩けばおそらく誰もが見惚れるであろう美しさだった。

「あの……………どうしましたか？」

「ん？ ああ、あまりにも可愛かったから思わず見惚れてた」

「可愛いっ!?! ……あ、ありがとうございます勇者様」

彼女は褒められて照れてるのか頬を紅く染める。その恥じる姿もまた可愛い。……………ん？ 勇者様？

「なあ……………えーと？」

「はっ！ 申し遅れました、私はこの家の者でヴァルキリーと言います」

ヴァルキリー？ 女神の名前であったな。確か北欧神話ではワルキューレと呼ばれて、戦場において死を定め、勝敗を決する女性的存在と呼ばれているな。まあその話は置いて本題に入らなければ。「ヴァルキリーな。じゃあいくつか質問させてくれ、まず勇者様ってなんだ？ 俺そんな職業にジョブチェンジした覚えはないんだが」

「この町の占い師が予言で言ってたんです。『天より舞い降りし人の子。その者、勇者でありこの町を照らす存在なり』。それで貴方が空から落ちてきたのでそれで占いで「ちよ、ちよつと待った！」 はい、なんででしょう？」

お、落ち着け！俺、空から落ちてきた!?! 俺は部屋にいた筈なのになんで空から落ちるんだよ！ そんな事アニメのよくあるファンタジな世界しか通用し……………ファンタジー？ 俺は嫌な予感を感じカーテンを思いっきり開く。光が差し込み反射的に目を閉じた。そして目を開けるとそこには……………

「……………」

空にはヘリや飛行機が飛行している筈なのに、空にはドラゴンが飛行している。下を見ると車などなく馬車がある。そしてファンタジー世界でよく見る巨大な城が見える。俺は確信した。俺は……異世界に來ちまったようだ。ははは……。人生なんて無理ゲーだ、マゾゲーだって何度となく思ったが……

「遂にバグった。もう何これ、超クソゲー……」

「え!?! ゆ、勇者様!?!」

俺はヴァルキリーの心配する声を聞きながらまた意識を失った。